

～ あれから7年 東日本の今 ～

合同会社みさき未来を訪ねました

川口幸男



4月22日(日)合同会社みさき未来を訪問し、代表者の三浦草平さん(31歳)に案内していただき、新地町の農場を見学させていただきました。みさき未来の社員は三浦さん家族3人と地元の若者の雇員3人の計6人。南相馬市小高区井田川地区で両親と共に営農していましたが、東日本大震災に伴う地津被害と原発事故で一時、県外へ避難を余儀なくされましたが、三浦さんは「生まれ育った福島での農業をあきらめたくない」との思いから新地町で営農を再開すると同時に、荒れ地となって

放置されているふるさとの井田川地区でも農業の再興拠点を作ると共に、国の復興交付金などを活用して太陽光発電や風力発電等をすすめています。

新地町の農場 田4ha・畑1ha



新地町の農場の周りは近くにある溜め池の水をみんなで使って畑作中心の農業を行っていた地域だそうで、合同会社みさき未来がここで米を作ろうとしたら、周りの生産者から溜め池の水が枯れてしまうので困るという声が上がったそうです。そこで三浦さんは地下100mまで井戸を掘って、その水を使って農場を始めました。又、ここは風が強いので周囲に暴風ネットを張り巡らせました。

主要作物の米(コガネモチ、天のツブ、コシヒカリ)は飼料米を1/3・食用米を2/3生産。米の生産は農薬と化成肥料を地域基準の半以下にし、こだわり栽培を行っています。

福島県産の米・野菜・果物等の風評被害対策として、JGAP(農薬や肥料の管理基準を定めて食の安全や環境保全を目指す)の認証取得を目指しています。

又、農産物の放射能汚染に対する検査をお米は全量、野菜は品目ごとに定期検査を行い、その結果をホームページで公開しています。

たまごは鶏を平飼いでびのびとした環境で飼育し、餌は米などを発酵させたこだわりのブレンドをし、おいしく栄養のあるものを食べさせています。

野菜は農薬不使用で、こだわりの有機肥料を使用し、丹精込めて育てています。

年間15~20種類程の野菜を作付けし、新地町の農場ではイチジク、ニラを重点品目としてブランド化を目指しています。

井田川地区の農業再興拠点

井田川地区復活への道として、2017年6月に綿花プロジェクトを立ち上げ活動してきましたが、生産は少量に終わりました。今年は、5月12日に綿花の種まきイベントを計画しています。

生物質、遺伝子組み換え作物など食品に対する安全・安心にこだわり、JGAP（農薬や肥料の管理基準を定めて食の安全や環境保全を目指す）の認証取得を目指し、放射能汚染検査等の情報公開をホームページで積極的に行って、消費者へ安全な商品を届けたいという強い意思を感じました。

訪問で感じたこと

放射性物質、残留農薬、畜産物に蓄積された抗

今回の東北訪問ツアー全体を通して感じたこと

- (1) 事前に外山さん、菊池さんから、訪問先の資料や関係する書物を紹介していただき、事前に目を通すことで訪問ツアーはより充実した内容となりました。
- (2) 「すがとよ酒店」の菅原文子さん
菅原文子さんについては、自著「あなたへの恋文」やNHK放送での出演番組で、こんな方かというイメージはありましたが、実際にお会いして話を伺うと、芯の強さと未来を切り開いていこうとする逞しさを感じました。
- (3) 津波による人的被災は天災ではなく人災
東北地方は、たびたび大津波で多大な犠牲者を出し、その教訓が語られ後世に残されています。しかし、今回の津波の被害者の声を聞くと、津波に対する備えが日常的に十分ではなかったことが語られ、結果として、今回も多大な犠牲者を出してしまいました。
- (4) 原発 20k 圏内の避難指示解除は幻想です
国は「避難指示解除区域は、除染が進んだ！」としています。除染されているのは解除区域の田畑と人家敷地周辺 20メートル範囲内のみです。実際に地面から 1m の高さで放射線量を測って見ましたが、人家の敷地をちょっと外れた草むらではガイドの人が線量計の数値を見て、15 分間で年間被ばく線量をオーバーしてしまうと警告するので、その場を慌てて離れました。これではとてもじゃありませんが、小さな子どもがいる家族は帰還できません。
- (5) 東北取材ツアーの報告会及び、被災地ツアーの紹介
今回の東北取材ツアーの報告を、毎年開催されている学生や市民対象のサマーセミナーで紹介するなどして、東北の現状を一人でも多くの人に伝え、また、被災地ツアーの紹介をして被災地に足を運んでいただく機会を作っていけるようにできればと思います。